

260. 長浜平野における弥生遺跡の立地

1. はじめに

弥生文化期の水稻耕作は、当初は丘陵の最前部、谷底平野に導入され、定着してくると次第に沖積平野を開墾していったが、開墾地はあくまでも水利の良い場所（後背湿地など）を中心に、生活域を広げていったと考えられる。

本稿では、その生活域拡大の痕跡が旧地形の分析でアプローチできるかどうか、長浜平野について検討する。復元された旧河道をもとに、遺跡がどのように分布するかをみていきたい。

2. 長浜平野の地理的環境

まず、長浜平野の地理的環境について確認しておきたい。平野の地形を考える場合、上流山地から供給される砂礫の量、堆積盆の形成状況、地殻運動、湖面変化など流域全体の自然条件と平野との関係を考慮する必要がある。なかでも河川の影響力と沖積平野の発達には最も深い関わりを持つ。臨海部の河川は水河性海面変化と一次的対応を示すが、琵琶湖に流入する河川群は琵琶湖を局地的な浸食（もしくは堆積）基準面とする内陸河川の様相を呈するとされる。その低地の広がりには湖岸沖積平野と呼ばれている。

河川により浸食された上流域の山地の土砂は、山麓へと運搬され受け皿となる琵琶湖に堆積する。河口部における砂・泥の拡散には、湖底の地形とともに湖流の強弱や卓越風の方向が影響を及ぼしている。さらに扇状地・三角州の発達には地盤運動も大きく関係している。湖盆の沈降が大きい地区では三角州が発達しやすい。姉川・高時川は流域規模が大きく土砂の掃流量も多いが、湖盆の沈降により河口は急激に水深が深くなり、デルタの地先に沈水三角州が発達している。低地は流域規模の大きい河川の下流に大きく発達している。その代表としては湖南の野洲川、湖東の愛知川、湖北の姉川、湖西の安曇川が挙げられる。

長浜平野の大部分は姉川扇状地が占めている。一般に起伏が小さく軟らかい地層からなる扇状地では、谷口を頂点として左右に河道の移転を繰り返しており、扇状地地形の進行を促している。この河道移転は水文学的要因と僅かな地盤の傾動を鋭敏に反映している。

県内の主要な扇状地の形成には気候変化に伴う河川水理環境の変化や湖面変化の影響を受けるが、形成の時期は現在までに確認されている遺跡の状況から縄文時代あるいはそれより古い時期に溯ると考えられる。湖面の変化はもちろん汀線を変化させるが、三角州の発達にも密接な関わりを持つ。特に第四紀以降の湖面変化に伴い発達した三角州は地下の古い扇状地の上に現三角州が重合しながら発達したもので、標高90m以下の三角州地帯と扇状地地帯との境界は漸次的である。すなわち、琵琶湖岸低地で山麓から湖岸にかけて見かけの上では扇状地から三角州へと移行しているが、扇状地と三角州が形成されたのは同時期ではなく、単成平野ではない。このような滋賀県の低地発達の特色は低地遺跡の発掘調査の際には常に念頭に置かなければならないといわれている。

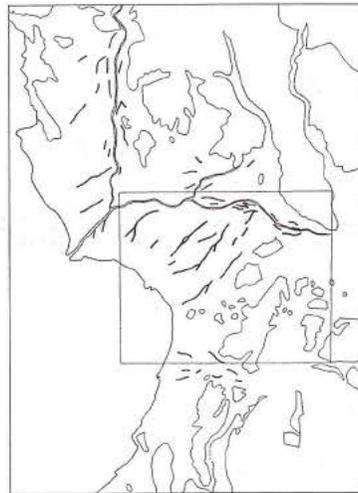
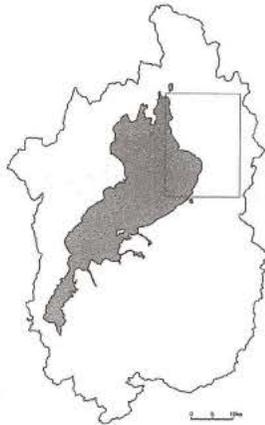
姉川扇状地は姉川・草野川・田川による複成平野である。旧高時川河口である尾上町地先の湖底には、河口の移動を推定させる複数の沈水デルタと旧浜堤が読み取れるのに対して、長浜から姉川河口付近にかけては、沈水地形の発達が極めて不鮮明で平滑な湖底地形となっており、伊吹山麓における姉川流路変更以後に現扇状地や三角州が形成されたとすれば、姉川デルタの形成は極めて新しい時期と推測されている。

3. 長浜市の縄文・弥生遺跡の立地

弥生遺跡の立地状況を把握する前に、縄文遺跡についても確認する必要がある。弥生時代を通じての立地の変遷が、縄文遺跡のそれとつながるものなのであろうか。

長浜市内の縄文・弥生遺跡の分布は次頁の通りである。縄文遺跡は標高92.5mライン以上におおむね分布している。このことから、当時の汀線をこのあたりに復元することも一つの案として可能である。

また弥生遺跡は、姉川の旧流路に沿って偏在していることがよく分かる。明確な水田跡は現在のところ未確認であるものの、水利のよい場所を選んで集落が発達していることは、現山路川流域に分布する大成玄遺跡・鴨田遺跡・大辰巳遺跡などから理解できよう、また、通常上流部に向かって耕地は開発されていくと考えられているが、中期以降に集落が形成される高橋遺跡・高橋南遺跡は現在の湖岸に近く立地している。これは弥生時代中期以前に汀線が後退したことにより、



92.5 95 97.5 100 105 110 115 120 125



No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	ヒハタ町遺跡	22	常昌寺遺跡
2	十里町遺跡	23	正言寺遺跡
3	列見町遺跡	24	宮司東遺跡
4	地藏遺跡	25	宮司遺跡
5	口分田北遺跡	26	室遺跡
6	野瀬遺跡	27	地福寺遺跡
7	川崎遺跡	28	福濟寺遺跡
8	長浜北高遺跡	29	塚町遺跡
9	小堀遺跡	30	高橋南遺跡
10	八幡東遺跡	31	高橋遺跡
11	高田遺跡	32	大戌亥遺跡
12	豊公園湖岸遺跡	33	鶴田遺跡
13	柿田遺跡	34	大辰巳遺跡
14	北郷里小遺跡	35	永久寺南遺跡
15	保多館遺跡	36	永久寺遺跡
16	堀部遺跡	37	大東遺跡
17	墓立遺跡	38	今川南遺跡
18	春近遺跡	39	今川東遺跡
19	堀部西遺跡	40	中町田遺跡
20	大塚遺跡	41	木ノ根町遺跡
21	越前塚遺跡	42	番導寺遺跡

87.5 90 125
長 浜 平 野 の 主 な 遺 跡

この地が生活領域となったことを推定する手がかりとなるものである。

4. まとめ

姉川は扇状地を成長させながら北遷していったかのように見えるが、旧流路自体は埋没することなく、規模の大小は不明であるが水流のある河川であったと考えられる。今回、弥生遺跡はそうした水利のよい旧流路沿いに偏在することが確認できた。大まかに縄文遺跡はやや標高の高い位置に、弥生時代中期からは標高の低い位置に立地していることがわかったが、これは琵琶湖面の変遷に起因するというのも一つの要素と

して考えられる。

現山路川沿いには弥生遺跡が偏在するが、これらを営んだ集団が同一のもので時期的に変遷していくものなのかは現在のところ判断できない。今後、土器など遺物の組成や遺跡の形態などを詳細に検討していくことによって明らかになるだろうが、これらは今後の課題である。
(大崎 康文)

〈参考文献〉

池田 碩・大橋 健・植村善博「滋賀県・近江盆地の地形」(『滋賀県自然誌』1991 財団法人滋賀県自然保護財団)

261. 長浜市上寺地遺跡の埋没古墳の調査

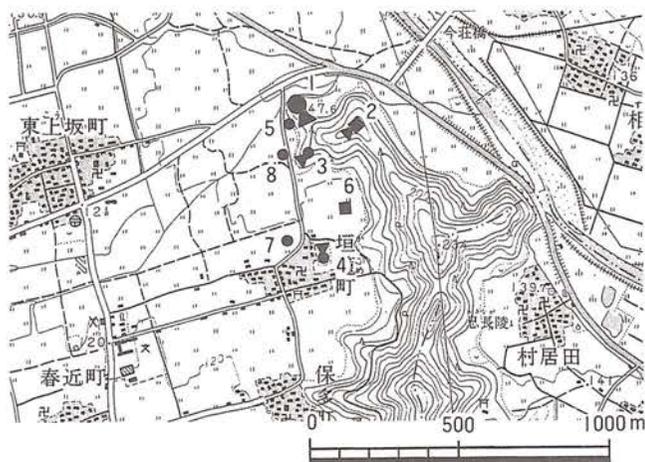
1

上寺地遺跡は長浜市垣箆町の北側の小字「上寺地」・「下寺地」を中心に広がる遺跡である。上寺地遺跡の名の由来は、「上寺地」・「下寺地」と称する部分から、水田耕作中などに瓦などが採集されたことによるという、平安時代の寺院跡として周知されてきたが、長い間、本格的な調査もおこなわれておらず、遺跡の内容については不明な部分が多かった。しかし、遺跡のすぐ東側には横山丘陵の北端部が迫っており、県指定史跡である茶臼山古墳をはじめ、山ノ鼻古墳（前方後円墳）・龍ヶ鼻古墳（前方後方墳）・垣箆古墳（県指定史跡・前方後円墳）などの湖北地方を代表する古墳が存在することから、当該地域の古墳時代を解明する上で重要な遺跡の1つと目されてきた。

しかし、近年になって県営は場整備事業郷里東地区垣保工区の工事が計画・実施されることとなり、それに伴って、平成5年度から、主に小排水路線・管網施設路線の発掘調査をおこなってきた。上寺地遺跡については、平成6年度から平成8年度にかけて調査がおこなわれ、不明であった遺跡の内容の一部が明らかとなった。特に、平成8年度調査においては埴輪を伴った4基の埋没古墳が検出された。この平成8年度分の調査については、現在（平成9年度）整理調査を継続中であり、報告書は平成10年度刊行の予定であるが、報告書に先駆けて、その調査成果の一部について報告するものである。

2

まず、上寺地遺跡の概要について触れておくと、最



1. 茶臼山古墳 2. 龍ヶ鼻古墳 3. 山ノ鼻古墳 4. 垣箆古墳
5. 西山古墳 6. 神塚古墳 7. 上寺地古墳 8. T7検出古墳
上寺地遺跡周辺の古墳

古の出土遺物には縄文時代晩期の深鉢がある。その後の弥生時代の遺物・遺構は検出されておらず、再び遺構が営まれるのは、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてである。この時期の遺構には堅穴住居などがあり、総じて東海系の影響を強く受けるものである。その後、古墳時代中期から後期にかけての堅穴住居も検出されているが、小排水路線などに伴う、いわゆる線的な調査であり、その広がりについては、なお不明な部分が多い。

瓦については、旧流路などから出土しているものの、平瓦・丸瓦がほとんどであり、寺院を直接示す遺構も確認されていない。「上寺地」・「下寺地」と称する部分の中心の調査ではないため、推測でしかないが、寺院関連の遺構は存在しなかった可能性がある。その場合は、付近に瓦窯が存在したものと捉えるのが妥当であると考えられる。

以上が、上寺地遺跡についての概要であるが、中でも検出された遺構・遺物の内容・量が豊富なのは古墳時代のものである。さらに、上寺地遺跡を中心とした地域は、『近江國坂田郡志』の中でも、字名に「神塚」・「コバイシ（小陪趾の意と捉えている。現在では小林。）」・「小塚町」などが残るところから、埋没古墳の存在する可能性が指摘されていた。今回報告する4基の埋没古墳の検出は、その指摘を裏付けるものとなった。

3

検出された4基の埋没古墳のうち西山古墳（茶臼山古墳のすぐ西側の字「西山」に位置する直径約21mの円墳。周溝・葺石・埴輪をもち、特に葺石が墳丘斜面だけでなく、周溝外側にも葺かれている点で注目される。）については、すでに『滋賀文化財だより』No232で報告をおこなっており、それを参照されたい。

神塚古墳

字名「神塚」の残る地点で検出された一辺約6m～6.5mを測る方墳である。周溝を含めると一辺約8mである。ただし、墳丘の北側コーナーは一部掘り残されているようである。残存状況は極めて悪く、周溝は深いところでも約25cmしか残っておらず、墳丘の盛土も確認されていない。規模は小さいながら埴輪をもつことが確認されており、すべて周溝内からの出土ではあるが、円筒埴輪・朝顔形埴輪・靱形埴輪の3種類が確認されている。そのほか、須恵器の甕・甕と土師器の高杯が出土している。甕はTK208型式で捉らえらるとおもわれるもので、埴輪は川西宏幸氏の編年のIV期にあたるものとおもわれる。

上寺地古墳

字「西江田」で検出された埋没古墳である。今回報告する調査区の南側は、平成7年4月に長浜市教育委員会によって発掘調査がおこなわれており、埴輪をもつ、直径約17mを測る円墳であることが確認されている。今回検出されたのはその北側部分で、新たに墳丘斜面に葺石をもつことが確認された。調査区の幅が約1mと狭いため、葺石の配列方法については不明である。また、後世の削平により、盛土も確認できていない。出土したのは円筒埴輪のみで、すべて周溝内からである。川西編年のV期にあたるものとおもわれる。また、垣籠古墳に大変近い位置で検出されていることやその出土埴輪の時期も近いとおもわれることから、両古墳の関係が注目される。

T7 検出古墳

山ノ鼻古墳が存在する尾根を西側に降りた平坦地で検出された埋没古墳である。検出されているのは墳丘の南側部分のみで、北側については完全に削平されており、検出できていない。また、調査区の幅が1mと狭いため、墳形やその規模については不明である。しかし、葺石とおもわれる施設が確認されており、そこから検出された遺物も円筒埴輪片のみであるため、古墳であると判断した。出土した埴輪は、川西編年のIV期にあたるものとおもわれるものである。現在、整理作業中であり、古墳の名称はまだ付けられていないため、T7 検出古墳として報告する。

4

以上、平成8年度の上寺地遺跡の調査で検出された埋没古墳について概観してきた。このほかにも、平成8年度には、これらの古墳の築造に携わった集団の居住地と推測される柿田遺跡の発掘調査が長浜市教育委員会によって実施されており、4基の埋没古墳(円墳)が検出されている。また、県営ほ場整備関連の調査では、土坑内に一括廃棄されたと考えられる大量の埴輪群や垣籠古墳の前方部北側の調査で埴輪片が検出されるなど、直接古墳に関わるとおもわれる遺物の検出も相次いでいる。現在、整理作業中のものも含まれており、その成果が期待されるが、いずれにしても、横山丘陵の北端部付近に立地する古墳群の性格を解明する上で、また、湖北地方の古墳時代を解明する上で重要な発見であったといえよう。

(稲葉 隆宣)

〈参考文献〉

『改訂近江國坂田郡志』第一巻 坂田郡教育会 1938
「湖北の古代」『長浜市史』第1巻 長浜市史編さん委員会 1997
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 1978



神塚古墳検出状況(北西から)



上寺地古墳検出状況(西から)



T7 検出古墳検出状況(南から)